Ⅸ　学　　歌　　等

1 京都大学学歌
2 学生歌
3 応援歌
4 逍遥の歌

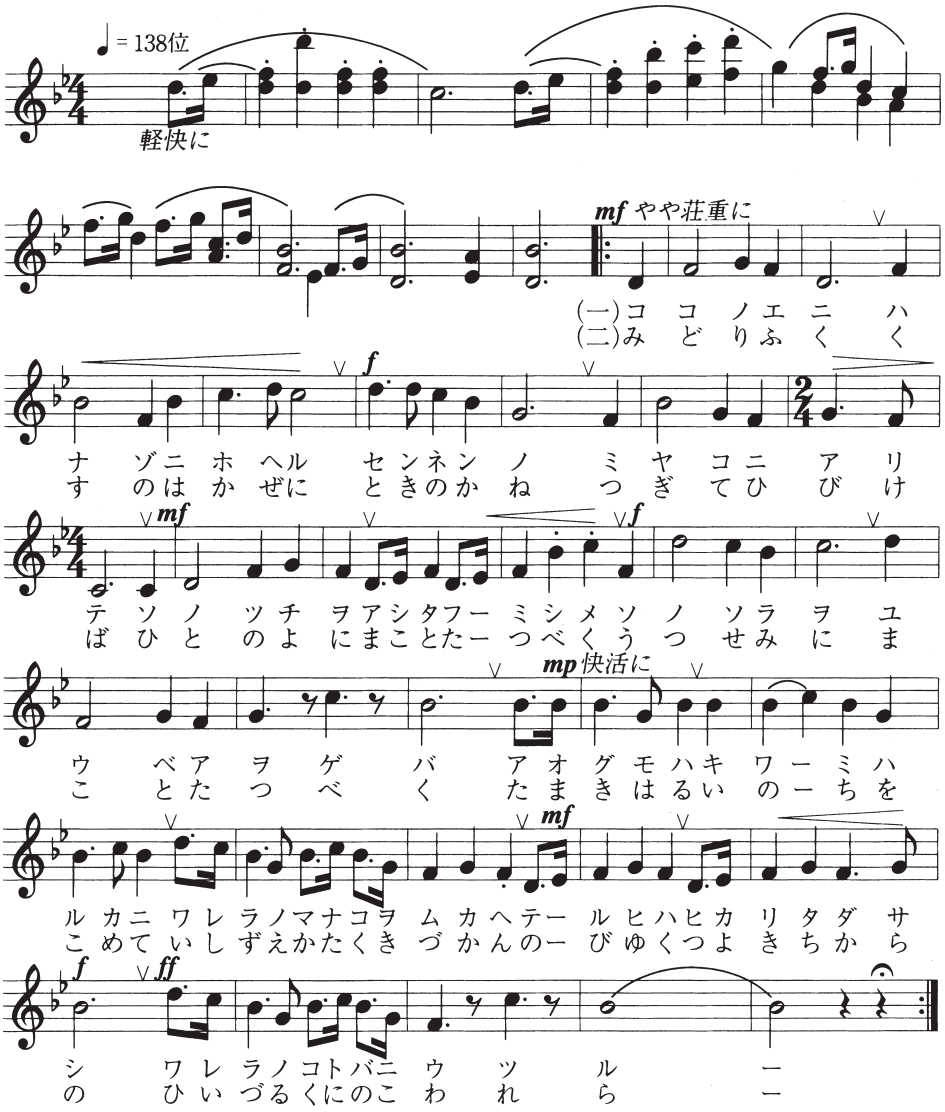
1　京都大学学歌（昭和15年１月18日制定）

(1)　九重に　花ぞ匂へる
千年の　京に在りて
その土を　朝踏みしめ
その空を　夕仰げば
青雲は　極みはるかに
われらの　まなこをむかへ
照る日は　ひかり直さし
われらの　ことばにうつる

(2)　緑吹く　樟の葉風に
時の鐘　継ぎて響けば
人の世に　まこと立つべく
現身に　まこと立つべく
たまきはる　命をこめて
いしずえ　堅く築かん
伸びゆく　強き力の
日出づる　国の子我等

初代総長　木下廣次先生の揮毫

水梨　彌久 作詞
下総　皖一 作曲



学歌は，昭和15年（1940年）１月18日，告示第１号によって制定されたものである。

その歌詞は，前年の５月から11月にかけて学内で公募されたもので，その応募作品から１等に選ばれた昭和13年本学文学部国語国文専攻卒業生の水梨彌久の作品である。

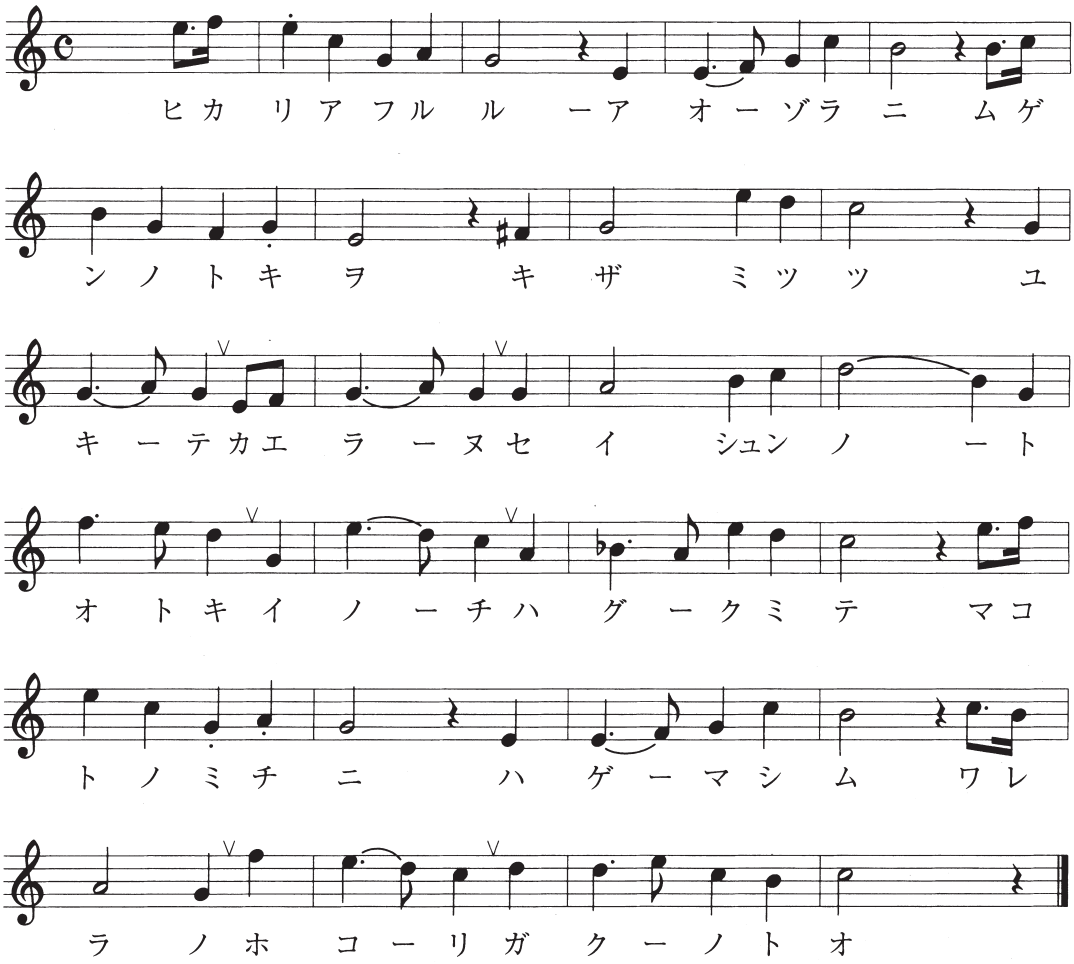
また，作曲は，当時，東京音楽学校の助教授であった下総皖一に依頼したものである。

―「京都大学70年史」による―

2　学　生　歌

長崎　太郎 作詞
芥川　　徹 作曲

Tempo di Marcia
（♩＝114）



(1)　光溢るる蒼空に　　無限の時を刻みつつ　　逝きて帰らぬ青春の
　　尊き命育みて　　真理の途に励ましむ　　吾等の誇学の塔

(2)　嗚呼ここにしも東西の　　思想の潮渦巻きて　　荒るる怒涛の地を打てど
　　八つの灯火掲げつつ　　学徒吾等の拠りて立つ　　岩根は固し学の塔

(3)　楠の大木に風薫り　　萌ゆる若葉に陽は映えて　　今日廻り来ぬ記念の日
　　自由独立自治を求め　　吉田山辺に学舎を　　創めし大人を偲ぶかな

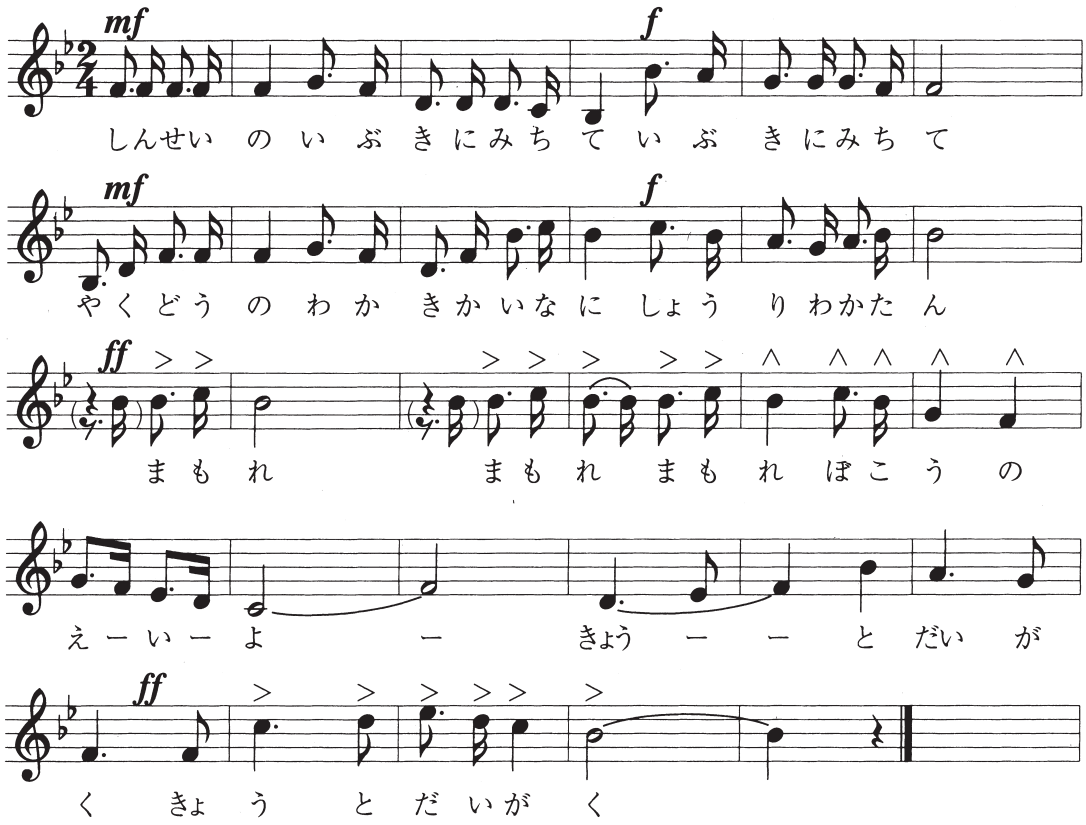
(4)　嵐雄叫ぶ唯中に　　学の自由を譲りてし　　不抜の信念君知るや
　　国敗るとも外国に　　学の誉を弥高く　　挙げし功を思わずや

(5)　朝靄曳きて黙深き　　巷を覚ます時の声　　闇に暮れゆく都路に
　　比叡の大嶺を背にし　　光を高く掲ぐなる　　吾が学塔に栄あれ

（昭和28年６月18日学生歌公募入選作）

3　応　援　歌

中川　裕朗 作詞
多田　武彦 作曲



(1)　新生の　息吹きに充ちて　息吹きに充ちて
躍動の　若き腕に　勝利分たん
守れ　守れ　守れ　母校の栄誉
京都大学　京都大学

(2)　麗しき　吉田の里に　吉田の里に
幾星霜　鍛えし力　ここに尽さん
示せ　示せ　示せ　母校の伝統
京都大学　京都大学

(3)　公明の　日輪のもと　日輪のもと
高鳴るは　希望の凱歌　自由の潮
たたえよ　たたえよ　たたえよ　不滅の光
京都大学　京都大学

（昭和33年制定）

4　逍遥の歌

沢村胡夷 作詞作曲

(1) 紅萌ゆる岡の花
早緑匂う岸の色
都の花に嘯けば
月こそかかれ吉田山

(2) 緑の夏の芝露に
残れる星を仰ぐ時
希望は高く溢れつつ
我等が胸に湧きかえる

(3) 千載秋の水清く
銀漢空にさゆる時
通へる夢は昆崙の
高嶺の比方ゴビの原

(4) ラインの城やアルペンの
谷間の氷雨なだれ雪
夕はたどる北溟の
日の影暗き冬の波

(5) 嗚呼故里よ野よ花よ
ここにも萌ゆる六百の
光も胸に春の戸に
嘯き見ずや古都の月

(6) それ京洛の岸に散る
三年の秋の初紅葉
それ京洛の山に咲く
三年の春の花嵐

(7) 左手の文にうなづきつ
夕の風に吟ずれば
砕けて飛べる白雲の
空には高し如意ヶ嶽

(8) 神楽ヶ岡の初時雨
老樹の梢伝う時
檠灯かかげ口桶む
先哲至理の教にも

(9) 嗚呼又遠き二千年
血潮の史や西の子の
栄枯の跡を思うにも
胸こそ躍れ若き身に

(10) 希望は照れり東海の
み富士の裾の山桜
歴史を誇る二千載
神武の児等が立てる今

(11) 見よ洛陽の花霞
桜の下の男の子等が
今逍遥に月白く
静かに照れり吉田山

紅もゆる歌碑